走れメロス(5)

太宰 治

（まどろんだメロスの耳に水の流れる音が聞こえました。見ると、岩の裂け目から清水が湧き出ています。）

その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手ですくって、一口飲んだ。ほうと長いため息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。①肉体の疲労回復とともに、僅かながら希望が生まれた。義務遂行の希望である。我が身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を木々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は信じられている。私の命なぞは問題ではない。死んでおわびなどと、気のいいことは言っておられぬ。私は信頼に報いなければならぬ。今はただ②その一事だ。走れ！　メロス。

（中略　メロスは再びシラクスの町に向けて走り出しました。メロスは口から血を噴き出しながらも走ります。）

「ああ、メロス様。」うめくような声が、風とともに聞こえた。

「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。あなたのお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、だめでございます。むだでございます。走るのはやめてください。もう、あの方をお助けになることはできません。」

「いや、まだ日は沈まぬ。」

「ちょうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。お恨み申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かったなら！」

「いや、まだ日は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕日ばかりを見つめていた。走るより他はない。

「やめてください。走るのはやめてください。今はご自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じておりました。③刑場に引き出されても、平気でいました。王様がさんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念をもち続けている様子でございました。」

「④それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。ついてこい！　フィロストラトス。」

メロスの変化

メロスは疲労の回復とともに「正義」「信実」「愛」に立ち返り、次第に、義務の遂行よりも大切なことのために走ることとなる。

・泉の水を飲む場面
　義務遂行の希望。名誉を守る希望。信頼に報いなければならぬ。

・フィロストラトスとの対話
　信じられているから走る。間に合う、間に合わぬは問題でない。なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走る。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「肉体の疲労回復とともに、僅かながら希望が生まれた」とあるが、このときのメロスの心情を、情景を通して描写している一文を探し、最初の三字を答えなさい。

□□□

(2) ——線②「その一事」とは何を指しているか。本文中から一文で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□～□□□

(3) ——線③「刑場に引き出されても、平気でいました」とあるが、なぜセリヌンティウスは平気でいたのか。最も適当なものを選びなさい。

ア メロスのことをただただ信じていたから。
イ メロスが間に合うことを必死で願っていたから。
ウ メロスを疑う王に反発し、強気な態度をとっていたから。

〔　　〕

(4) ——線④「それだから、走るのだ」とあるが、この場面でメロスはなぜ走っているのか。最も適当なものを選びなさい。

ア まだ日が沈まず、間に合うかもしれないから。
イ セリヌンティウスに対する負い目があるから。
ウ 自分が誰かに信じられているから。

〔　　〕